

瑞浪市化石博物館研究報告 第49号特別号, p. 1-21.
Bulletin of the Mizunami Fossil Museum, no. 49 (Memorial Volume), p. 1-21.
©2022, Mizunami Fossil Museum
Manuscript accepted on February 8, 2022; online published on March 15, 2022.

—Memorial—

糸魚川 淳二

(1929年8月21日–2021年11月11日)

地質古生物と博物館と—二足の草鞋を履いた自然科学者

Junji Itoigawa

(August 21, 1929–November 11, 2021)

**In memory of a natural scientist wearing two hats;
geology/paleontology and museum**

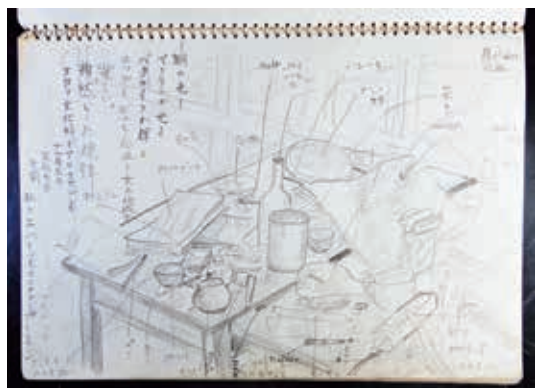


糸魚川淳二名古屋大学名誉教授は、1929年(昭和4年)8月21日に岐阜県恵那郡坂下町(現 中津川市坂下町)に生をうけ、2021年(令和3年)11月11日に永遠の眠りにつかれた。先生は、ご自身を「地質古生物学と博物館-二足の草鞋を履く」と評されていた。京都大学入学から大学教官時代は地質・古生物学の徒であり、1970年代以降は瑞浪市化石博物館の設立に深く関わったことから博物館研究に傾き始め、二足の草鞋を履くに至る。

先生は、200篇を超える両分野における研究論文や著作物を残されている。

このメモリアルの執筆には、良き共同研究者であり友であった柴田博名古屋大学名誉教授が適任であったはずであるが、残念ながら先に鬼籍に入ってしまったが故、晩年の門下生の一人が筆をとることとなった次第である。そのため、記述や解釈に誤りがあるかもしれない。どうぞご容赦いただきたい。

先生は、太平洋戦争と戦後の激動期に学生時代を過ごされた。1942年4月に岐阜県恵那中学校(現恵那高等学校)入学、1945年4月に奈良県橿原市の海軍経理学校予科入校、同年8月に同校廃校後、恵那中学校第四学年(当時の中等学校の修業年限は5年)に復学、1946年9月に旧制第四高等学校理科甲類(現 金沢大学、修業年限は3年)入学、1949年3月に同校を卒業した。



京都大学時代の下宿の机(スケッチブックより)

学制改革により旧学制から新学制への移行真っ只中、1949年4月に京都大学理学部に入学、1952年3月に学士試験合格、同年4月に京都大学理学部大学院研究奨学生(当時の大学院特別研究生制度でいわゆる特待生)となる。本課程を修了後、1957年4月に京都大学理学部大学院に入学、同年8月に大学院を退学、名古屋大学理学部教務員に採用され、名古屋大学での研究生生活を送ることとなる。名古屋大学では、理学部地球科学科(現 地球惑星科学科)地史学研究室に所属し、

1958年2月に同大学理学部助手、1971年5月に同助教授、1986年4月に同教授となり、1993年3月に定年退職を迎えた。その後、同大学名誉教授に推挙された。

退官後は、1995年4月から2000年3月まで椋山女学園大学文学部(現 国際コミュニケーション学部)教授を、2001年4月から2005年3月まで豊橋市自然史博物館長を務めた。

その後は、瑞浪市日吉町にある自宅兼私立半原版画館で、妻の登美子氏(助手になられた直後の1959年にご結婚)と、地元内外の芸術家たちと語りつつ、自身の研究を生涯続けた。

1. 地質学・古生物学者として

先生は、京都大学理学部在籍時代には地質学鉱物学を専攻し、榎山次郎教授の第3講座に籍を置いた。自然が大好きな少年時代を過ごしたこと、教授の元で何か新しいことができるという期待があったこと、そして、講座が自由な雰囲気に含まれていたこと(先生は英国流個人主義と呼ぶ)が選んだ動機らしい(糸魚川, 1987)。

この教育方針は、名古屋大学教官時代に受け継がれていく。地史学講座では、先生は学生に対して一切干渉せず強要することもなく(よい意味での放任主義)、学生は自由にテーマを選び研究することができた。その反面、先生の研究評価は厳しく、可か不可の二者択一であった。

ここで、先生の論文の特徴を掲げてみたい。和文にしる英文にしる、長文を使うことがなく、無駄な装飾もなく、単純明快で分かり易いものであった。研究論文は単著が多く、指導生との共著論文はほとんどない。自分が彼らに助言を与えるのは当たり前、共著者である必要はない、むしろ、自分の名前が加わることで指導生の論文の創意が失われるのではないか、というお考えがあつてのことと思う。自分の師にならって、名誉(honorary)著者やゲスト(guest)著者になりたくなかったのであろう。

また、学位審査(博士)は厳しく、ステップアップや将来に期待するというものではなく、ご自身が独り立ちできる研究者として認めた者のみ審査の門を通ることができた。

先生は、師である榎山教授の影響を強く受けたことを自認しており、新生代層序・地史と貝類化石の研究に従事することになった。そして、これらの研究を基とした古生態学と古環境学の研究へと発展させていった(糸魚川, 1987)。

卒業論文では宮崎層群をフィールドとして選び、

多数の貝化石を採集した。その後、大学院では貝類化石の研究をテーマとし、綴喜層群と岩村層群の貝類化石を採集する。しかし、同門に貝類化石の研究者がいないため、貝類化石の同定が出来ない。そこで、京都大学理学部動物学教室の扉を叩くこととなる。この時、動物学教室には日本を代表する貝類学者であった黒田徳米・波部忠重両博士がいた。ご自身の書かれた記事の中にも記されているように(糸魚川, 1986), この出会いこそが、貝類化石の研究へ傾倒するきっかけであった。



フィールドに入った日を描く(スケッチブックより)

最初の論文は、1953年に貝類学雑誌に掲載された「宮崎層群産の *Siphonalia* 属 1 新種について」であった。それ以後、瀬戸内区中新統堆積盆地の層序学的研究や新第三紀貝類化石の分類学的・古生態学研究を進め、1961年に「瑞浪層群(中新世)の古生態学的研究」により京都大学から理学博士号を授与された。これらの研究を継続しつつ、東海地方の第四紀層の層序や貝類化石に関する研究も進めていった。

これまでの研究が高く評価され、「中新世瀬戸内地域の軟体動物の古生態学的研究」により1974年度日本古生物学会奨励金(現在の同学会学術賞)を授与された。推薦文は日本古生物学会報告・記事第98号に掲載され、要約すると次の通りとなる。「瑞浪層群の詳細な調査を基礎とし、堆積相と軟体動物化石群集の古生態に相関があることを認め、それらを他地域の瀬戸内区中新統の軟体動物化石群と比較することにより、古環境方面の開拓と推進

に大きな功績を挙げた。今後の一層の発展を期待する”。

これ以後、研究の多くは、瀬戸内区の中新世古地理、日本の中新世熱帯的環境の解明に力を注がれることとなる。なお、1974年という年は、後述するように、先生にとって生涯の研究方向を決める岐路に立つ年でもあった。

瀬戸内区の中新世古地理に関する研究は、瀬戸内区中新統の貝類化石とその群集を中心に研究していた名古屋大学教養部の柴田博博士(故人)との共同研究が多い。1980年に「瀬戸内区の中新世古地理」(柴田・糸魚川, 瑞浪市化石博物館研究報告)をまとめた。その後の知見を踏まえ、1992年に「瀬戸内区の中新世古地理(改訂版)」(糸魚川・柴田, 同研究報告)で、一応の完結をみることとなる。なお、柴田博士は、先生と同じく、後述する瑞浪の化石調査団員でもあり瑞浪市化石博物館の準備室委員を務めるなど博物館準備に大きな関わりをもっていたが、もう一人、博物館設立を語る上で忘れてはいけない重要な人物がいた。この3人が揃わなければ、先生は「二足の草鞋」を履けなかったに違いない。

1960年の初頭、先生は岐阜県立瑞浪高等学校で教壇にたっていた西本博行氏(故人)と出会う。西本氏は、広島大学の稲葉明彦博士に師事し、鳥羽水族館の大山桂博士(故人)とも深い交友があった在野の貝類研究者である。瑞浪層群の貝類化石に興味があり、そのために、岐阜県で教員となつたらしい。他に類を見ない個性的な人物であったが、確固たる信念をもって研究に取組み、新生代貝類化石、また、軟骨魚類化石の研究で多くの足跡を残している(糸魚川, 2004)。

先生の研究業績の中に、ヒザラガイ類や軟骨魚類の論文がある。これは、西本氏が先生をこれら論文の筆頭著者に据えることにこだわり譲らないためであった。先生は根負けして嫌々ながらも引き受け、最終的にはまとめさせられる責を負わされていたのである。

瑞浪層群の貝類化石は、Itoigawa(1960)で296種を数えた。その後、1974年には、454種の貝類化石が記載された(糸魚川・柴田・西本, 瑞浪市化石博物館研究報告第1号)。全ての種に対し、日本語の簡潔で判りやすい記載が添えられている。454種を同定し記載できうる(しかも、短期間で可能な)、3人の力量には全くもって驚かされる。論文筆頭著者は糸魚川であるが、各種の記載について誰が行ったのか明記している。引用するときには、例えば、柴田 in 糸魚川・柴田・西本となるわけで、3人が各人の仕事を尊重した結果であった(しかし、西本単名はなく、やはり、糸魚川・西本であった)。

1981年から1982年には、3人に瑞浪市化石博物館の奥村好次学芸員が加わって520種を網羅したモノグラフを出版している(糸魚川・柴田・西本・奥村, 瑞浪市化石博物館専報第3号A, B). このモノグラフは、同時代の貝化石を研究する者にとって良き参考資料となっている。

日本の中新世熱帯的古環境の研究は、新潟大学の津田禾粒博士(故人)と山形大学の山野井徹博士とともに精力的に推進された。1950年に大山桂博士が、富山県八尾地域の中新統黒瀬谷層からマングローブ沼を特徴づける貝化石(*Geloina, Telescopium*)を発見した。京都大学時代の先輩にあたる津田博士は、1960年に黒瀬谷層から見つかった熱帯・亜熱帯要素を含む貝類化石群に対し黒瀬谷動物群を提唱した。その後、先生は、瀬戸内区中新統(瑞浪層群や備北層群)から熱帯系貝類化石を認め、備北層群から*Geloina*や*Globularia*などの化石を報告した(糸魚川・西川, 1976)。1978年には、熱帯的環境を示す化石のデータを整理し、前期中新世末～中期中新世初頭にその産出が限られていることから、この時期の古環境と古地理を論じるに至った。さらに、1980年には、黒瀬谷層と備北層群下部層からマングローブ植物の花粉化石が発見された(山野井・津田・糸魚川・岡本・田口, 1980)。これらの研究により、日本の中新世におけるマングローブ沼の存在が確かなものとなった。



1980年、シンガポールのマングローブ調査
(左手前, 糸魚川先生; 中奥, 津田博士)

日本の中新世の熱帯的環境の復元には、比較環境学的な見地からの研究が必要であり、東南アジアを中心とした地域の現生マングローブ沼調査(NINAYA調査)が始まる。NINAYA調査は、津田博士・先生・山野井博士・富山県の佐伯富男氏(故人, 自称は登山コンサルタントだが、日本学術会議南極観測隊第1次越冬隊員や富山雷鳥研究会長でもあった)の4名で1980年より始まる(NINAYAとは、4人の所属した新潟大学・名古屋大学・山形大学の頭文字に由来する)。2000年までに、13回に渡り、10ヶ国で、軟体動物・花粉および地形・底質などの調査が行われた。途中、佐伯氏や津田博士の死去があったが、新潟大学の寺澤達雄博士や名城大学の齊藤毅博士(先生の晩年の門下生の一人)が加わり調査が続けられた。



1980年、シンガポールのマングローブ調査の帰り
(左, 津田博士; 中奥, 佐伯氏; 右, 糸魚川先生)

この調査を通じて得られた知見を元に、国内での中新世の熱帯的古環境に関する研究が進展していく。いわゆる「モラスカ総研」やIGCP-246のProject-PANETS (Pacific Neogene Events in Time and Space)を通じ、先生らの研究成果が次々と公表されていった(津田・糸魚川・山野井, 1983; Tsuda, Itoigawa, and Yamanoi, 1986; 糸魚川・津田, 1986; Itoigawa and Yamanoi, 1990)。この過程で、先生は、前期中新世～中期中新世の軟体動物群、いわゆる門ノ沢動物群を整理し、前期中新世において亜熱帯性の明世動物群を新たに提唱し、前期中新世末～中期中新世初頭の熱帯性黒瀬谷動物群と亜熱帯性門ノ沢動物群を区別するに至った(Itoigawa, 1988)。さらに翌年には、前期中新世末～中期中新世初頭(およそ16 Ma)に熱帯環境が北へ拡大する海洋事変を、トロピカルスパイク(Tropical spike)と名付けた(Itoigawa, 1989)。これは、Barron and Baldauf (1990)が太平洋低緯度地域で認めた3回の気候温暖期のうちの一つ Neogene Climatic

Optimum I に対応する中緯度、日本域の海洋事変としてよく知られている。続いて、1990年には、古第三紀から現在までの日本における熱帯・亜熱帯系軟体動物群集の変遷を総括するに至った(糸魚川, 1990)。

瑞浪層群の貝類化石に始まり日本の中新世熱帯環境に至る研究については、1990年に「日本が熱帯だったころ—瑞浪の化石ものがたり」としてまとめられ青木書店から出版されている。

おおよそ1990年代初頭で、先生の目的とした軟体動物、古生態、古環境および古地理の研究は完結に向かった。しかし、マングローブ沼調査(NINAYA調査)は2000年まで続いた。これらの調査結果は、2003年にNINAYA調査メンバーの論文集として、瑞浪市化石博物館専報第9号「マングローブ沼の比較環境学—日本(中新世)と東南アジア・南西太平洋(現生)、軟体動物と花粉を中心に」として刊行された。特に、「マングローブ沼の比較環境学—日本(中新世)と東南アジア・南西太平洋(現生)—」(糸魚川・津田・山野井・斎藤・寺澤)中では、Itoigawa and Yamanoi (1990)以後の研究を含め、日本の熱帯環境の総括を行なっている。なお、この調査は、その後もマングローブ沼の経年変化を記録するために、2009年と2012年にも行われている。

先生は、日本地質学会、日本古生物学会、日本第四紀学会、日本貝類学会、地学団体研究会、化石研究会等に、早くから所属し、これら学会の運営や後進の研究者の育成に尽力した。日本地質学会、日本古生物学会、日本第四紀学会及び日本貝類学会では、評議員を永らく務め、後に名誉会員となる。1990年に、瑞浪市化石博物館で古生物学会例会が開催された時には、「軟体動物化石研究の諸問題—横山又次郎先生記念シンポジウム—」のコーディネーター役を務めた。化石研究会では、1990年～1992年の3年間、会長の責務を果たし、2009年の設立50周年記念大会の際には会より感謝状が贈呈された。

名古屋大学と関わりの深い名古屋地学会では、1992年～1993年の間会長に就いた。また、化石好きのアマチュアらによって設立された東海化石趣味の会(現 東海化石研究会)では、1969年の発足時から顧問を引き受け、会の成長を見守った。また、各地で開催される一般向けの講演で壇上に上がった数を数えるのは不可能に近い。土岐市民大学の講師は、1989年～2014年の26年間休むことなく続けた。

晩年は、公益社団法人東京地学協会の会員でもあったので、ジオツアーに奥様と共に参加するのが年中行事の一つであった。



日本古生物学会例会(1990年)



例会時の野外巡検(1990年)

1980年代、瑞浪市化石博物館の普及活動の中で、瑞浪市大湫町の山口清重氏と出会う。山口氏は、樹木の種を求めて日本中を飛び回る種苗家で、瑞浪市の文化財審議会委員も務めた在野の植物研究者である。氏との出会いを通じ、シデコブシに目を向けるようになる。シデコブシとは、ハナノキ・ヒツバタゴとともに伊勢湾周辺の湿地に自生する東海地域に固有な樹木で、春先に淡い桃色の花が一斉に開き、緑まだ早い雑木林を彩ることでよく知られる。1990年に瑞浪市内のシデコブシ・ハナノキの優れた自生地が土地開発行為等により消失の危惧が生じた際、山口氏と共に、「日本シデコブシを守る会」を設立し、自らは会長に就き、その保護・保全活動を行うこととなった。翌年には、瑞浪市シデコブシを守る会が設立され、こちらでも会長に就いた。NINAYA調査を通じ、マングローブ沼の移り変わりやその保全活動を見てきたことや、立山連峰の自然保護に力を入れた佐伯富男氏のことが背景にあったかもしれないが、ここから自然保護(保全)に通じる研究が始まる。先生は、科学者らしい切口で、保護・保全活動のためには、現況を把握する必要があるとして、まずは、会の人たちと一緒にシデコブシの自生地の調査を始めた。調査には5年を費やし、

1996 年に調査報告書となる「シデコブシの自生地」を日本シデコブシを守る会(編)として発刊する。

愛知県で 2005 年日本国際博覧会が開催されることになったが、その会場となる海上の森は、シデコブシの自生地もある里山であり、開発行為の問題は様々な論争を巻き起こした。その解決を図るべく 2000 年に愛知万博検討会議が開催され、先生もこの会議に参加し議論に加わった。これらの活動を通じ、先生は自然保護の考え方の一つを次のように提示した。「自然保護は人と自然のつきあい方の問題である。...いま、求められていることは、保護・保全と開発をいかにバランスよく長期的に維持するか、ということである、単なる保護(protection)だけでなく、保全(conservation)へ、持続可能な発展が求められているといえよう(糸魚川, 2001)」。



シデコブシ自生地調査

ここで、シデコブシとの関わりは終了したかと思われるのだが、先生の興味は、その後もシデコブシに加え、ハナノキとヒツバタゴへと向いていく。2004 年以降、先生は、地図とカメラと調査機器 1 式をもって、自生地の調査をコツコツと続けた。自生地の環境、特に地形・地質・水環境の調査が、保護活動の基礎的知識を得る方策の一つと考えたからである。その結果、調査地点は 830 カ所に及び、2007 年に調査結果の予報をまとめるに至った(糸魚川, 2007)。その後、大量の調査記録を整理し、「シデコブシ・ハナノキ・ヒツバタゴの自生地」3 部作を瑞浪市化石

博物館研究報告で発表する。2011 年には、「地形・地質・水環境との関連」篇を、2013 年には「自然環境と自生地の現況」篇を、そして、2015 年には、これまでの研究を総括するとともに人との関わりや保全を含めた「包括的検討」篇をまとめ、この研究の一応の括りとした。

しかし、先生は、自生地の経年変化が気になったようで、亡くなられる間近 2021 年 8 月まで調査を続け、自然科学者のまま、その生涯の幕を引くこととなった。最後の論文は、奇しくも瑞浪層群産貝類化石の論文であった(安藤・糸魚川, 2018)。

先生の残した化石標本・文献・調査資料などは、先生と関わりが深かった瑞浪市化石博物館、豊橋市自然史博物館および名古屋大学で大切に保管されている。

2. 瑞浪市化石博物館建設から博物館論へ

瑞浪市化石博物館が世に生まれた端緒は、こんなイメージであろうか。「1971 年 8 月、研究室のドアが叩かれる。訪問者は瑞浪市からやってきた」ドアを叩いたのは市役所の職員で用件は、まもなく瑞浪市内で中央自動車道の建設工事が始まり化石含有層が失われるので、化石調査団の主任調査員として指揮・指導してほしいというものであった。先生は快諾し、博物館の必要性を説いた。瑞浪市では、1950 年代後半から、すでに化石の収蔵・展示施設の建設を模索していた。先生の頭の中には調査後に博物館を創りたいという思いがあり、市が目指すものと目的が一致した。以後、先生は二足の草鞋を履く。大学での教官としての日々、そして瑞浪での化石調査と博物館の準備の日々と、先生の一生の中で最も慌ただしく、そして最も充実した時を過ごす。



中央自動車道化石調査

こうしてして中央自動車道建設工事に伴う化石調査が、その年の11月に始まった。調査団には、柴田博博士と西本博行氏が加わり、途中から奥村好次氏が加わった。西本氏の率いる瑞浪高等学校地学部関係者や地元市民が調査に参加し、工事の合間をぬって化石を集める。続々と新しい化石が見つかり、調査室に運ばれていく。クリーニング・整理・同定作業が進むにつれ、標本数は10万点を越すこととなり、同定作業が追いつかない。

これと並行して博物館設立計画が進む。そんな中、博物館の基本方針(化石の専門博物館、地域の博物館、開放された博物館、の3柱)が決まり、1972年1月には先生の展示計画案が、11月には基本プランが出来上がった。1973年3月に博物館建築・展示計画案が市議会で承認されると同時に建設費も議決される。翌4月には博物館準備室が設置され、調査団員は準備専門委員も兼ねることとなった。続いて、展示施工業者である(株)丹青社の里見親幸氏らが加わって、活発な議論を経て、6月に最終展示計画案が出来上がった。その年の終わりには博物館の建築がほぼ完了し、翌年3月7日に展示施工完了となり、1974年5月1日に瑞浪市化石博物館が開館した。



瑞浪市化石博物館(1983年)

長々と化石調査から博物館開館までの道のりを書いたが、実際に費やした年数を数えてみるとよい。1971年11月化石調査開始、1972年1月展示計画案提示、1974年5月博物館開館であるから、実質2年と7ヶ月で博物館を創ってしまったことになり、全くもって驚嘆に値する。しかも、先生自身もだが、行政側にも、誰一人として博物館創りの経験者はいなかった。いわば素人たちが、陳列館ではなく博物館を創ってしまったのである。展示に携わった先生たち主力3名は、当然本業があったわけだが、並行して10万点という化石を同定しなければならなかった。さらに、先生は、同時期、最初の著書「日本列島の歴史」の原稿も書きながら、「瑞浪市化石博物館研究報告 第1号」に掲載する論文の原稿もまとめつつ、その発刊の準備と編集も行っていた。研究報告の原稿は、博物館の展示施工完了日と同日1974年3月7日に印刷業者に入稿された。何と多忙な日々を送ってきたのであろうか。

展示施工完了日の3日後、1974年3月10日、先生は奥様と共にヨーロッパに旅立った。古生態学の第1人者、エガー教授のいるイギリスのウエールズ大学スオンジ校とフランスのリヨン大学に在外研究員として1年間赴任することとなったのである。故に、3月7日の展示施工完了日が、先生たち展示グループにとっての開館日であった。これからの博物館の在り方を考えていた先生は、ヨーロッパ赴任中、在外研究員としての本業に加え、博物館の源流を探るべくヨーロッパ(イタリア、スイス、モナコ、フランス、ベルギー、オランダ、デンマーク、イギリス)にある150館を巡った。先生にとって、自分の目で見て確かめることが、モノを理解することの近道だったに違いない。ヨーロッパ滞在中の日記には、訪問した博物館の特徴が列記されている。その後も、博物館巡りは続き、最終的に29カ国を巡った。



中央自動車道化石調査
(左、奥村氏;右、糸魚川先生)



2004年, エガー教授(故人) 宅を訪ねる
(左, 糸魚川先生; 中, 教授の奥様; 右, 登美子氏)

帰国後, 1975年4月1日に瑞浪市化石博物館学芸員(嘱託)となり, 館の職員とともに博物館の運営にあたった. 自ら, 博物館の各種講座の講師を務め, 特別展を企画し, 日本各地の新生代の化石を調査・収集し, そして研究報告の編集に携わった. 特別展のポスターは, 自身が創作した抽象的デザインのものにこだわったが, これは観る人の想像力を引くと考えたのだろう. 博物館の化石調査は, 日本全国に及ぶ. また, 約1万8千点に及ぶ先生の寄贈標本は, 日本の新生代貝類化石を中心としたコレクションである. 現在, 採集が困難な産地の標本もあり, 館を訪れた研究者は, 当初の目的を忘れて標本を観入っていることが多い.

展示は館内ばかりではなかった. 博物館の周りには, 化石を含んだ地層が広がっていたので, これらに着目し野外展示を考えた. こうして博物館向かいには地層見学地が, 博物館下には「化石の地下壕」(当初は懐古洞)が整備された.



博物館の野外調査で西本氏と討論する(1979年)



講座「ふるさとの自然をたずねて」
(中, 山口氏; 右, 糸魚川先生)

化石博物館の開館とともに, その周辺には, 市民公園, 東濃西部歴史民俗資料館, 市民プール, 屋外体育施設や体育館が整備されていく. そして, 1979~1980年には, 博物館の展示改修が行われ, 至る所に巧妙な仕掛けが施された展示の型が定まった. ここでも, 先生自ら展示計画を立案し監修に当たる. 触れる展示や体験できる展示に拘り, 当時, 日本では馴染みのない, 今で言うハンズオン展示を展開した. また, 先生は, 自身の考案した展示を客観的に批評し, 今後につなぐべく反省点も記録として残されている(瑞浪市化石博物館展示替え設計グループ, 1980).



貝化石コーナーの展示(左, 旧展示; 右, 新展示)



博物館の展示解説会(1987年)

1974年に刊行となった瑞浪市化石博物館研究報告第1号には、34論文が掲載され、475ページと115図版からなり開館記念号に相応しいものであった。先生は、ヨーロッパに赴任中でありながらも、初稿は先生のもとに送られ自身で校正を行なった。第2号(1975年)から22号(1995年)の間(第19号を除く)、研究報告に投稿された論文原稿を査読するとともに編集に携わる。この研究報告も、「開かれた博物館」の姿勢に併せ、自由投稿を基本とした。自身(館の学芸員として)も多数の地質古生物や博物館に関する論文や記録をまとめ毎号掲載していた。第19号は、糸魚川淳二博士記念号として柴田博士が編集にあたり、先生の退官に併せ1992年に発刊された。先生と関わりのあった研究者60人による41篇の論文が掲載され、557ページと71図版と、まさに記念号に相応しいボリュームであった。

第3回瑞浪シンポジウム(1989年)
(左、糸魚川先生;右、柴田博士)

また、化石博物館の研究の一環として、瑞浪シンポジウムを企画し、先生の呼びかけに賛同した研究者の協力により実現した。第1回は、1977年に「新生代の海の古生物地理」と題し、続く第2回は、1978年に「新生代の陸の古生物地理」として開催さ

れた。第3回に当たる「日本の新生代生物相—時空分布と系統を中心に—」は、先生と柴田博士により企画され、1989年に開催された。その成果は、瑞浪市化石博物館専報第7号に論文集としてまとめられ発刊されている。

この化石博物館の創設と学芸員として実践を通じて得た経験と、ヨーロッパの博物館巡りが、糸魚川先生の考える博物館論の原点となる。化石博物館の創設から初期の活動は、著書「博物館だより ヨーロッパに原点をもとめて。共立出版、1979年刊」・「博物館を考える。続博物館だより。共立出版、1982年刊」などに詳細があり、自身の想いとともに残されている。両書の中では、瑞浪市化石博物館は、地方都市における理想的な博物館と述べられている。決して誇張ではなく、これ以後、日本各地で計画された博物館整備に大きな影響を与えたことは事実である。

開館から20年経った1994年には、博物館の増改築計画が始まり、翌1995年には実施設計が行われ、1996年の施工を待つばかりとなった。しかし、とある事情で増改築は行われなかった。化石博物館と豊橋市自然史博物館の建設・展示の経験を踏まえた博物館創りの集大成であったため、先生はどれほど落胆されたことか。これが、先生の初めての挫折となり、結果として化石博物館から手を引くこととなる。しかし、その後の著書や論文の中で、化石博物館は、正当に評価、批評され、新展示についても提案がなされている。

その後、化石博物館の展示は、何度か小規模な改修が加わり、パネルは現代風に変更され、展示の一部は置き換わってしまったが、基本的なレイアウトは変更されていない。ご当地萌えキャラが展示室をガイドし、子どもたちは化石発掘ゲームに熱中し、小さい展示室の中では自己主張するモノで混み合い、起承転結のない展示となってしまった。2019年ごろだったろうか、先生は、最後に博物館を訪れ、何を思われたであろう。

先生の博物館への関わりは、瑞浪市化石博物館だけには留まらない。名古屋大学の教授として研究・学生指導、化石博物館の学芸員として活動を続けると同時に、1984年からは豊橋市自然史博物館の展示計画・設計にも関わり、1988年5月の博物館開館後は、1989年4月より同館顧問(嘱託)、2001年4月から同館の館長を務められた。2004年3月に同館館長を降り、柴田博博士が、その跡を継ぐこととなる。また、豊橋市自然史博物館開館後、1989年から今金町立博物館(仮称)の整備計画に加わる

(残念ながら博物館の建設に至らず)。大学退官後は、中津川市鉱物博物館、三重県立博物館(再整備が白紙)、三重県立総合博物館、美濃加茂市民ミュージアム、石川県自然史資料館などの整備にも携わった。その他、半田市博物館や福井県立恐竜博物館等で博物館協議会等各種委員を務められた。また、島根大学、椋山女学園大学、名古屋大学等では、博物館学(旧制度下の科目名称である)の講義を受け持った。

一方、1984年には、自らの石版画コレクションをもとに瑞浪市日吉町に「わたくし博物館(ミニウム)」として半原版画館を開くに至った(現在、これら石版画コレクションと資料は、美濃加茂市民ミュージアムで大切に保管されている)。

こうした経験の積み重ねから、「博物館だより」では概念に過ぎなかった博物館論が、次の段階へと進み、1993年に「日本の自然史博物館」が出版された。科学者らしい手法で、博物館をつくる・運営するという実践面と、博物館の本質を明らかにし教えるという研究・教育的側面から自然史博物館を捉えようとしたものであった。それから数年が経ち、1995年には、(株)丹青研究所の顧問に就任し、旧友の里見親幸氏らとともに博物館に関わる様々なテーマについて活発な議論をすることとなる。こうした中で出来上がったものが、1999年の「新しい自然史博物館」であった。「日本の自然史博物館」で触れた自身の「自然史博物館論」をさらに深め、これからの自然史博物館のあり方を多方面から分析・検証したものである。エコミュージアムや包括的展示についても触れられ、21世紀の博物館に対する提言を行なったものである。なお、両書のブックジャケットは、ご自身が制作された版画が用いられており、芸術家としての一面を感じ取ることができる。

しかし、ここが終点ではなかった。丹青研究所との関わりは、2006年まで続いた。その結果、「博物館—現在と未来—」と題した論文集(瑞浪市化石博物館研究報告第35号(Supplement))を編集し2009年に刊行された。自然史系のみならず、今度は人文系博物館を含めて、博物館の現在・展示論・エコミュージアム等についてまとめたものである。ここでは、パリ国立自然史博物館と滋賀県立琵琶湖博物館からヒントを得た包括的展示論と、エコミュージアムの日本版となる「えこ」ミュージアム論が展開されている。翌2010年には、「包括的博物館—21世紀の博物館像」(瑞浪市化石博物館研究報告第36号)をまとめるに至った。この論文は、実践に身を置いた先生の博物館論の集大成であり、タイトルが示すが如く21世紀の理想的博物館像を提起したものである。

「僕は博物館学を講じているのではなく、私の考える博物館論を説いているのだ」と、先生はよく語っていた。先生の持論である“包括的展示論”・“「えこ」ミュージアム”、“包括的博物館”、それから、“後進に送るメッセージ21世紀の博物館、キャッチコピー”を著書から引用した。それから、10数年が経ち、日本の博物館はどうなったであろうか。

包括的展示論とは

(1) 考え方(コンセプト)

A 「もの」・「こと」・「包括」, 「見る・楽しむ」・「知る・学ぶ」・「理解する・考える」の3つが基本要素である。

B 「つなぐ」・「まとめる」・「包み込む」が基本理念である。

C ソフトとハードの面でバリアフリーである。

D 「人と自然」-「人のくらし」と「自然のいとなみ」が典型的な大テーマである。

E 多様な、多数の、レベルの違うアイテムを整理し包括する。

F 放散的であり、同時に収斂的である。進化する展示である。

G 生態学における生態系に相当する、博物館展示系である。

H 立体的ネットワーク(コンビネーション・ネットワーク・リンク・バラエティ)がある。

I 1~複数の軸を設定する。

(2) 展示の実際

J 展示に A, B, C の3つの類別(内容・規模・難易についてそれぞれ)を設定する。

K 1つの大きくない(1000 m²±が理想的)空間、ときに2~3の複数空間(~3000 m²)でシンプルな形をとる。

L 動線をつくらない。

M 明るい、単純な色彩構成とする。

N 多様な展示手法を使用するが、「もの」主体であり、映像は多くしない。

O 基本方針に基づいてつくられた設計にしたがって、優れたリーダーの下、確かな技術を駆使して展示施工する。

P インタープリター、音声ガイドを利用する。

(3) 効果

Q レベルに応じた対応があるので、誰でも理解でき、楽しく面白く利用して、ステップアップする。

R すべての人に満足を与える展示である。

S リピーターが増える(繰り返し見る)。

T 利用者に迎合するイージーな方向だけに向かない。基本的な本来の姿勢を崩さない。

U 総合館・郷土館など、複数の分野をもつ館に

向いた展示である。

V ある部門, 2つの部門, 複数の部門とあらゆる形で構成できる。たとえば, 自然史系, 自然史系-歴史系, 美術系-自然史系などでも可能である。

W 企画展にも応用できる。

X 「考える」ことを知る(自分を, 自然を, 社会を)。

(4) さらに

Y 博物館活動を包括し, 博物館全体を包括的にできる。

Z 他機関, 他博物館との間にも包括的関係をつくりうる。「えこ」ミュージアムはその一つの例である。

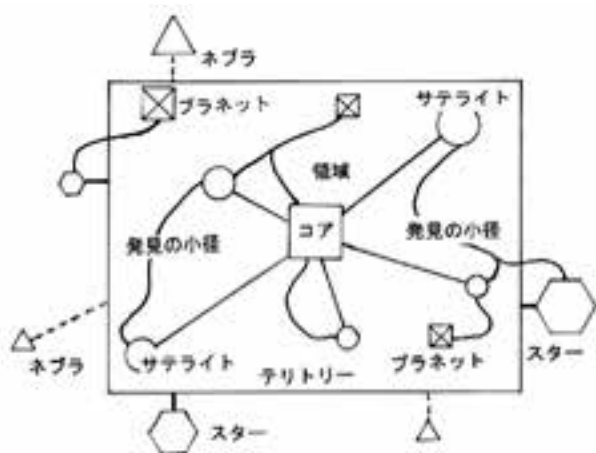
糸魚川(2010)

「えこ」ミュージアムとは

基本にあるのは地域における, ある形の包括的博物館づくりである。目的とすることは博物館活動を住民参加の地域運動として進めることである。キーワードは, 博物館, 地域, 住民参加, 人と自然, 遺産の調査・保存, 多様性, 柔軟性, 複合的, 包括的, 日本的, である。

本来の概念に従って, 領域(テリトリー)を決める。コアには既存の確かな博物館を選ぶ。サテライト施設は何でもよい。博物館はもとより, 公民館・図書館などの社会施設, 公園・運動場など, お寺や神社, 里山を含めた地域に広がる自然は大きな要素である。自然・文化・産業に関する遺産のみならず, 現在活動している場・施設でもよい。

発見の小径は自由に設定できる。自然歩道・公園の道などは最適である。ルートそのものが「展示物」でもある。サテライトとならない高レベルの博物館・関連機関はプラネットとして, 独立存在させ, コンタクトを密にする。領域外の博物館・機関, 近接する博物館はスター, 博物館以外の研究・教育・市民活動の機関・施設はネブラと位置づける。これらのすべてはネットで結ばれる。この考えを模式的に表わしたのが次の図である。

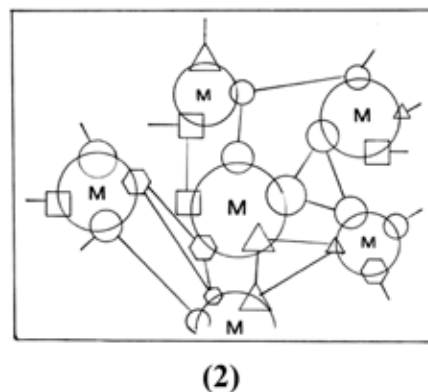
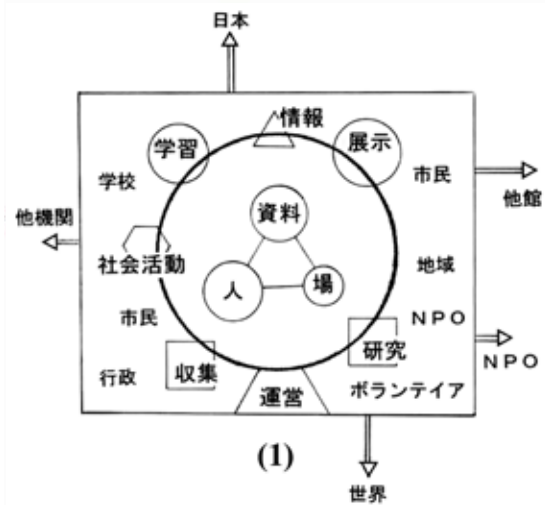


「えこ」ミュージアムでは, 社会活動の面がより重要となり, 情報機能もより広くなることが考えられる。全体の活動をリードする有力なリーダーが必要でこの機関の要である。活動の中心を担うのはいうまでもなく学芸員, あるいはそれに相当する役割を果たす人である。研究者でなく市民である場合もありうる。NGOを含めた市民の参加が大前提で, それが無い「えこ」ミュージアムはありえない。運営は行政と市民グループとの協働で行われる。弾力的に考え, 運営・活動をする。いずれにせよ, 市民にとって楽しい場であることが大切であるが, 学習の場であることも忘れてはならない。

糸魚川(2009)から要約

包括的博物館とは

- (1) 基本的な博物館活動をする博物館である。
- (2) ある形の包括的活動をする博物館である。
- (3) さまざまな博物館活動を結び・まとめ・包み, 包括的にする博物館である。
- (4) 他館・他機関・市民と協働する博物館である。
- (5) 未来を展望し, 外へ開かれた博物館である。
- (6) 言葉で表せば「立体的ネットワーク博物館」である。
- (7) 図(1)・(2)はイメージを図で表わしたものである。



糸魚川(2010)

21世紀の博物館, キャッチコピー

- ・楽物館から学物館へ, そして創考館へ.
- ・博物館で, 見る・楽しむ, 学ぶ, そして考える.
- ・博物館, みんながオーナー, そして学芸員.
- ・博物館は文化の泉.
- ・博物館, 地域のつくるホームページ.
- ・知識のコンビニ-博物館.
- ・博物館を日常生活に.
- ・ハンズオンから歴史観・自然観まで博物館.
- ・知の e-mail を(は)博物館へ(から)・いやしの現場-博物館.
- ・環境・観光・健康は博物館で.
- ・日本中にエコミュージアムを.
- ・○○○(例 大学; 寺; 神社; 公園など)にエコミュージアムを.
- ・「もの」と「情報」の玉手箱-ミュージアム.
- ・バーチャルのディズニーランド, リアルの博物館.
- ・リアルからバーチャルまで, 博物館は情報センター.

糸魚川(2010)

3. おわりに

本稿を書いた私は, 1987年の名古屋大学大学院博士課程(前期)から, 先生の地史学研究室でお世話になった. そして1992年に博士(理学)を取得した, 晩年の門下生の一人でもある. 奇しくも1994年から瑞浪市化石博物館に勤務し, 現在に至る. 私は, 8年前に関節リウマチを発症し, それに伴う胸椎骨折のため, 野外調査が無理となりデスクワーカーとして研究を続けている. 実は, 先生は1998年に胃癌を患ったのだが, 見事に完治され, その後20年以上も世界中を飛び回り, マングローブやシデコブシ調査, 博物館に関する研究を続けられた. 私が心折れることなく研究を続けられたのは, この先生を見てきたからだと思う. 病気のことで先生には亡くなられるまで大変なご心配をおかけした. お役目が終わるまでは折り合いをつけて生きていくつもりなのでご心配なく.

本稿作成にあたり, 写真・情報提供をいただいた次の方がたのご厚情に心からお礼申し上げます.

氏原 温博士(名古屋大学), 遠藤三知郎氏(瑞浪市), 奥村好次氏(元 瑞浪市化石博物館学芸員・館長), 齊藤 毅博士(名城大学), 延原尊美博士(静岡大学), 松岡敬二博士(元 豊橋市自然史博物館学芸員・館長), 水垣文利氏(瑞浪市), 水野利之氏(瑞浪市), 山口清重氏(瑞浪市), 山野井 徹博士(山形大学名誉教授), 糸魚川登美子氏.

最後になりましたが, 故人となられた糸魚川先生・柴田 博博士・西本博行氏との会話も辿りながら本稿をまとめたものです.

2022年1月21日 柄沢宏明 記

Appendix 1 主な研究業績・著作物目録

- 1953 糸魚川淳二. 宮崎層群産の *Siphonalia* 属 1 新種について. 貝類学雑誌ヴェキナス 17(4): 213–218.
- 1953 糸魚川淳二・坂本 享・粉川昭平. “奈良坂礫層”について. 堆積学研究 4: 1–2.
- 1954 石田志朗・糸魚川淳二・森島正夫・森下 晶・中澤圭二・小黒讓司. 京都府奥山田の新生代層. 地質学雑誌 60(703): 160–166.
- 1954 奥山田研究グループ. 奥山田の第三紀層. 地球科学 16: 1–7.
- 1955 糸魚川淳二. 岐阜県岩村盆地の新生代層. 地質学雑誌 61(722): 511–517.
- 1955 糸魚川淳二. *Katelysia (Nipponomarcia) nakamurai* Ikebe の変異について. 貝類学雑誌ヴェキナス 18(3): 176–184.
- 1955 Itoigawa, J. Molluscan fauna of the Mizunami group in the Iwamura Basin. *Memoirs of the College of Science, University of Kyoto, Series B* 22: 127–143.
- 1956 Itoigawa, J. Molluscan fauna of the Tsuzuki group in Kyoto Prefecture, Japan. *Memoirs of the College of Science, University of Kyoto, Series B* 23: 179–192.
- 1957 Itoigawa, J. On the Miocene Lucinidae from the Mizunami Group, Japan. *Transactions and Proceedings of the Palaeontological Society of Japan, New Series* 25: 1–6.
- 1958 Itoigawa, J. On some cephalaspid Opisthobranchia from the Japanese Miocene. *Transactions and Proceedings of the Palaeontological Society of Japan, New Series* 29: 175–183.
- 1959 糸魚川淳二. 古瀬戸内累層群の貝化石群集. 地団研総会討論会資料 (第13回). 54–55.
- 1960 西南日本新生代研究グループ. 西南日本の新生代地史—構造発達史への序説—. 地球科学 50–55: 56–65.
- 1960 Itoigawa, J. Paleocological studies of the Miocene Mizunami group, central Japan. *Journal of Earth Sciences, Nagoya University* 8: 246–300.
- 1961 糸魚川淳二. 三重県阿山郡阿波盆地の新生代層. 榎山次郎教授記念論文集. 榎山次郎教授退官記念事業会. 京都. 59–66.
- 1961 竹原平一・森下 晶・糸魚川淳二. 名古屋港の地盤. 名古屋港管理組合. 36 p., 2 maps.
- 1962 深田淳夫・糸魚川淳二. 愛知県地質図 1:200,000. 内外地図. 1 map.
- 1963 Itoigawa, J. Miocene rock- and wood-boring

- bivalves and their burrows from the Mizunami group, central Japan. *Journal of Earth Sciences, Nagoya University* 11: 101–123.
- 1963 糸魚川淳二. 中新世穿孔性貝類およびその生痕の化石—岐阜県瑞浪層群産—. *地球科学* 67: 1–12.
- 1964 竹原平一・森下 晶・糸魚川淳二. 名古屋港の地盤—改訂版—. 名古屋港管理組合. 45 p., 2 maps.
- 1964 Itoigawa, J. Quaternary molluscan fauna of the Kozakai mud, Kozakai, Aichi Prefecture, Japan. *Journal of Earth Sciences, Nagoya University* 12: 117–128.
- 1967 糸魚川淳二. 古生態学と堆積相. 日本地質学会・日本鉱山地質学会・日本鉱物学会・日本岩石鉱物鉱床学会・日本粘土学会連合学術大会討論会資料—堆積学に関する諸問題—. 日本地質学会, 日本鉱山地質学会, 日本鉱物学会, 日本岩石鉱物鉱床学会, 日本粘土学会. 131–135.
- 1967 糸魚川淳二・植村 武・菊地 清. 東濃第三系とウラン鉱床. 日本地質学会第74年年会地質見学案内書. 日本地質学会全国大会準備委員会. 名古屋. 26 p.
- 1967 糸魚川淳二. 古生態を示す 2, 3 の例. 早坂一郎先生喜寿記念文集. 早坂一郎先生喜寿記念事業会. 金沢. 225–230.
- 1968 糸魚川淳二・中山 清. 愛知県高浜町碧海層産の第四紀貝化石群. *貝類学雑誌* 27(2): 62–75.
- 1969 糸魚川淳二. 瀬戸内東部地域中新統の貝化石群. *化石* 17: 50–55.
- 1970 糸魚川淳二. 前期洪積世の貝類化石. *第四紀研究* 9(3–4): 164–167.
- 1970 糸魚川淳二. 岐阜県瑞浪地方の中新世貝類化石 1(明世累層). *日本化石集*. 築地書館. 東京. 10-5(N-16).
- 1970 糸魚川淳二. 岐阜県瑞浪地方の中新世貝類化石 2(生俵累層). *日本化石集*. 築地書館. 東京. 1-63(N-2).
- 1970 地団研地学事典編集委員会(編). *地学事典*. 平凡社. 1, 540 p. (分担執筆)
- 1971 小牧団研グループ. 小牧市周辺の矢田川累層. 中部地方の鮮新統および最新統 竹原平一教授記念論文集. 竹原平一教授記念会. 名古屋. 69–81.
- 1971 糸魚川淳二. 知多半島西北部知多町付近の常滑累層. 中部地方の鮮新統および最新統 竹原平一教授記念論文集. 竹原平一教授記念会. 名古屋. 83–98.
- 1971 春日井団研グループ. 春日井市付近の地形面. 中部地方の鮮新統および最新統 竹原平一教授記念論文集. 竹原平一教授記念会. 名古屋. 153–161.
- 1971 糸魚川淳二. 中国地方東部の中新世貝類化石群(予報). *化石* 22: 29–36.
- 1971 糸魚川淳二. 岐阜県岩村地方の中新世貝類化石. *日本化石集*. 築地書館. 東京. 15-35(N-34).
- 1972 糸魚川淳二. 古瀬戸内中新統の貝類化石群. 軟体動物化石による日本新生代の年代層位学資料集. 昭和46年度文部省科学研究費総研B-0804. 研究代表者 増田孝一郎(宮城教育大学). 15–20.
- 1973 糸魚川淳二. 日本列島の歴史. 現代新書. 講談社. 222 p.
- 1973 糸魚川淳二・柴田 博. 古環境の変遷と対比—瀬戸内区中新統の場合—. *地質学論集* 8, 日本新第三系の生層序と放射年代: 125–135.
- 1973 Itoigawa, J., and H. Ogawa. Pleistocene molluscan fauna of the Sakishima Formation, Shima Peninsula, Central Japan. *Science Reports of the Tohoku University, Second Series (Geology), Special Volume 6, Professor Kotori Hatai Memorial Volume*: 69–80.
- 1973 近畿・東海地方新生代研究グループ. 近畿・東海地方における鮮新世・最新世の構造運動. *地球科学* 27: 66–80.
- 1974 糸魚川淳二. 研究史. 瑞浪市化石博物館研究報告 1, 瑞浪の地層と化石: 3–7.
- 1974 糸魚川淳二. 瑞浪層群の地質. 瑞浪市化石博物館研究報告 1, 瑞浪の地層と化石: 9–42.
- 1974 糸魚川淳二・柴田 博・西本博行. 瑞浪層群の貝類化石. 瑞浪市化石博物館研究報告 1, 瑞浪の地層と化石: 43–203.
- 1974 糸魚川淳二. 瑞浪層群の生痕化石. 瑞浪市化石博物館研究報告 1, 瑞浪の地層と化石: 235–238.
- 1974 糸魚川淳二・西本博行. 瑞浪層群の軟骨魚類化石群集. 瑞浪市化石博物館研究報告 1, 瑞浪の地層と化石: 243–262.
- 1974 糸魚川淳二. 瑞浪層群と第一瀬戸内累層群. 瑞浪市化石博物館研究報告 1, 瑞浪の地層と化石: 353–364.
- 1974 糸魚川淳二. 瑞浪層群の古環境・古地理・地史. 瑞浪市化石博物館研究報告 1, 瑞浪の地層と化石: 365–367.
- 1974 糸魚川淳二. 瑞浪層群の時代と対比. 瑞浪市化石博物館研究報告 1, 瑞浪の地層と化石:

- 369–372.
- 1974 糸魚川淳二. 瀬戸層群. 瑞浪市化石博物館研究報告 1, 瑞浪の地層と化石: 373–383.
- 1974 糸魚川淳二. 瑞浪コハクの化石節足動物とその含有層 2. 瑞浪コハク含有層(釜戸層)の地質. 瑞浪市化石博物館研究報告 1, 瑞浪の地層と化石: 393–395.
- 1975 槇山次郎・森下 晶・糸魚川淳二. 日本地方地質誌 中部地方 改訂版. 朝倉書店. 451 p.
- 1975 Itoigawa J., and H. Shibata. New Miocene pelecypods from the Mizunami group, Mizunami City, central Japan. Bulletin of the Mizunami Fossil Museum 2: 15–34.
- 1975 糸魚川淳二・西本博行. 瑞浪層群のヒザラガイ類化石群集(第一報). 瑞浪市化石博物館研究報告 2: 35–50.
- 1975 奥村好次・西本博行・糸魚川淳二. 瑞浪層群宿洞相の新産地における軟体動物化石群集について(予報). 瑞浪市化石博物館研究報告 2: 51–60.
- 1975 瑞浪市化石博物館展示設計グループ. 瑞浪市化石博物館の展示設計. 瑞浪市化石博物館研究報告 2: 61–74.
- 1975 糸魚川淳二・西本博行・黒田正直・堀江弘保・成瀬 篤・渡辺康成. 千葉県銚子半島名洗層(鮮新世)産の *Carcharodon carcharias* (Linné). 瑞浪市化石博物館研究報告 2: 91–102.
- 1976 Habe, T., and J. Itoigawa. New Miocene land snail from Mizunami, Gifu Pref., Japan. Bulletin of the Mizunami Fossil Museum 3: 1–3.
- 1976 Itoigawa, J., and H. Shibata. Twelve new gastropods from the Miocene Mizunami group, Gifu Prefecture, Japan. Bulletin of the Mizunami Fossil Museum 3: 5–15.
- 1976 糸魚川淳二・奥村好次・西本博行. 瑞浪層群の腕足動物化石相. 瑞浪市化石博物館研究報告 3: 41–54.
- 1976 糸魚川淳二・西川 功. 岡山–広島県下の古瀬戸内中新統の 2, 3 の問題. 瑞浪市化石博物館研究報告 3: 127–149.
- 1976 糸魚川淳二・黒田正直・成瀬 篤・西本博行. 房総・三浦半島の更新世ヒザラガイ類化石群集. 瑞浪市化石博物館研究報告 3: 171–204.
- 1976 糸魚川淳二・渡辺俊典. 瑞浪層群の研究史—その 1 明治以前の記録—. 瑞浪市化石博物館研究報告 3: 205–212.
- 1976 糸魚川淳二. ヨーロッパの博物館 1. イギリス. 瑞浪市化石博物館研究報告 3: 213–225.
- 1976 糸魚川淳二. 岐阜県多治見市小名田の瑞浪層群. 瑞浪市化石博物館研究報告 3: 227–230.
- 1976 大塚寅雄・糸魚川淳二・柴田 博. 愛知県豊田市田靱鉦山産中新世化石. 瑞浪市化石博物館研究報告 3: 231–234.
- 1977 Itoigawa, J., H. Nishimoto, and S. Tomida. *Lepidoleurus morozakiensis*, a new fossil Polyplacophora from the Miocene Morozaki group, central Japan. Bulletin of the Mizunami Fossil Museum 4: 55–60.
- 1977 中生代サメ化石研究グループ. 日本産白亜紀板鰐類化石(第一報). 瑞浪市化石博物館研究報告 4: 119–138.
- 1977 糸魚川淳二(編). 第 1 回瑞浪シンポジウム記録 新生代の海の古動物地理. 瑞浪市化石博物館研究報告 4: 139–156.
- 1977 糸魚川淳二. ヨーロッパの博物館 2. フランス. 瑞浪市化石博物館研究報告 4: 157–167.
- 1977 森下 晶(編). 日本標準化石図譜. 朝倉書店. 242 p. (分担執筆)
- 1978 糸魚川淳二. 化石群集の時間的. 空間的変遷—軟体動物を例として—. 海洋科学 10: 21–25.
- 1978 Itoigawa, J. Evidence of subtropical environments in the Miocene of Japan. Bulletin of the Mizunami Fossil Museum 5: 7–22.
- 1978 Habe, T., and J. Itoigawa. *Miocenehadra nakamurai*, second species of *Miocenehadra* from Mizunami, Gifu Prefecture, Japan. Bulletin of the Mizunami Fossil Museum 5: 111–112.
- 1978 糸魚川淳二・黒田正直・成瀬 篤・西本博行・朝田 正・岩井立弥・林 清和. 木更津・市原付近の更新世ヒザラガイ化石群集. 瑞浪市化石博物館研究報告 5: 143–155.
1978. 糸魚川淳二(編). 第 2 回瑞浪シンポジウム記録 新生代の陸の古生物地理. 瑞浪市化石博物館研究報告 5: 157–163.
- 1978 糸魚川淳二・中村 実. 瑞浪層群の研究史 その 2 明治時代—昭和 20 年. 瑞浪市化石博物館研究報告 5: 165–174.
- 1978 糸魚川淳二・赤木三郎. 貝石画譜—江戸時代の化石図鑑—. 瑞浪市化石博物館研究報告 5: 183–185.
- 1978 糸魚川淳二. ヨーロッパの小さな博物館. 名古屋豆本 第 21 集.
- 1978 糸魚川淳二・鎮西清高・粉川昭平. 古生態学と古環境学—日本の新生代層を例として—. 日本の新生代地質. 池辺展生教授記念論文集. 池辺展生教授退官記念事業会. 京都. 155–167.
- 1978 糸魚川淳二. 日本新生代の化石生態系の研

- 究 研究成果報告書. 昭和 51・52 年度文部省科学研究費 一般研究 C no. 154277 研究代表者 糸魚川淳二(名古屋大学理学部). 6 p.
- 1979 糸魚川淳二. 愛知県の地質・地盤(その 2) [表層地質]. 愛知県防災会議地震部会. 22 p., 1 map.
- 1979 糸魚川淳二. 古瀬戸内地域新第三系 34. 岐阜県瑞浪地域. 日本の新第三系の生層序及び年代層序に関する基本資料, 「太平洋側と日本海側の新第三系の対比と編年」文部科学研究費総合研究(A)234052. 研究代表者 土 隆一(静岡大学理学部). 106–107.
- 1979 Itoigawa, J. Evidence of subtropical or tropical environments in the Miocene of Japan. Proceedings of the International Symposium on Marine Biogeography and Evolution in the Southern Hemisphere, Auckland, New Zealand, 17–20 July 1978. New Zealand, Department of Scientific and Industrial Research. 501–510.
- 1979 鮎河鯨研究会. 滋賀県鮎河産鯨化石. 瑞浪市化石博物館研究報告 6: 41–51.
- 1979 糸魚川淳二. ヨーロッパの博物館 3. オランダ・ベルギー・スイス・イタリー. 瑞浪市化石博物館研究報告 6: 145–153.
- 1979 糸魚川淳二. 博物館だより ヨーロッパに原点をもとめて. 共立出版. 220 p.
- 1980 柴田 博・糸魚川淳二. 瀬戸内区の中新世古地理. 瑞浪市化石博物館研究報告 7: 1–49.
- 1980 糸魚川淳二. 瑞浪地域の地質. 瑞浪市化石博物館専報 1: 50 p., 1 map.
- 1980 山野井 徹・津田禾粒・糸魚川淳二・岡本和夫・田口栄次. 西南日本の中新統中部から発見されたマングローブ林植物について. 地質学雑誌 86: 635–638.
- 1980 糸魚川淳二. 大昔の海と陸. シリーズ海4. らくだ出版. 東京. 54 p.
- 1981 糸魚川淳二・柴田 博. 瀬戸内区の中新世古生物地理—貝類化石相の検討—. 化石 30: 17–29.
- 1981 糸魚川淳二. 博物館のものと人. 化石 30: 121–125.
- 1981 糸魚川淳二. 岡山県川上地域. 日本の新第三系の生層序及び年代層序に関する基本資料(続編). 文部省科学研究費総合研究(B)530612. 研究代表者 土 隆一(静岡大学理学部). 82.
- 1981 糸魚川淳二. 日本の中新世における熱帯的・亜熱帯的古環境の研究. 研究成果報告書. 一般研究(C)454264. 研究代表者 糸魚川淳二(名古屋大学). 8 p.
- 1981 Tomida, S., and J. Itoigawa. *Spirula mizunamiensis*, a new fossil sepiida from the Miocene Mizunami Group, Central Japan. Bulletin of the Mizunami Fossil Museum 8: 21–24.
- 1981 Itoigawa, J., S. Tomida, K. Matsuoka, and Y. Ito. Fossil pearl from the Pliocene Kakegawa Group, Central Japan. Bulletin of the Mizunami Fossil Museum 8: 71–76.
- 1981 瑞浪市化石博物館展示替え設計グループ. 瑞浪市化石博物館の展示替え. 瑞浪市化石博物館研究報告 8: 191–195.
- 1981 津田禾粒・糸魚川淳二・山野井 徹. 日本の中新世中期の古環境—マングローブ沼の存在をめぐって—. 化石 30: 31–41.
- 1981 糸魚川淳二・柴田 博・西本博行・奥村好次. 瑞浪層群の化石—2. 貝類(軟体動物)—. 瑞浪市化石博物館専報 3A: 53 p.
- 1981 糸魚川淳二. 西南日本の中新世軟体動物化石の 2, 3 の問題—とくに古地理に関連して—. 軟体動物の研究—大森昌衛教授還暦記念論文集—. 大森昌衛教授還暦記念論文集刊行会. 新潟. 187–197.
- 1981 柴田 博・糸魚川淳二. 瀬戸内区の中新世貝類化石群. 軟体動物の研究—大森昌衛教授還暦記念論文集—. 大森昌衛教授還暦記念論文集刊行会. 新潟. 341–345.
- 1981 Itoigawa, J. Stratigraphic outlines of selected Neogene sequences. 8. Mizunami area. In R. Tsuchi, ed., Neogene of Japan, its biostratigraphy and chronology. IGCP-114 National Working Group of Japan. Shizuoka. 62–64.
- 1981 Tsuchi, R., and IGCP Working Group of Japan. Bio- and chronostratigraphic correlation of Neogene sequences in the Japanese Islands. In R. Tsuchi, ed., Neogene of Japan, its biostratigraphy and chronology. IGCP-114 National Working Group of Japan. Shizuoka. 91–104.
- 1981 IGCP-114 National Working Group of Japan. Paleogeographic map of the Japanese Islands during 16–15 Ma, the earliest Middle Miocene. In R. Tsuchi, ed., Neogene of Japan, its biostratigraphy and chronology. IGCP-114 National Working Group of Japan. Shizuoka. 105–109.
- 1981 糸魚川淳二. 東海の化石—太古の生きものたち—. 中日新聞本社. 243 p.
- 1982 糸魚川淳二. 博物館を考える. 続博物館だより. 共立出版. 194 p.
- 1982 Itoigawa, J., and S. Tomida. *Miohaliotis*

- amabilis*, a new haliotid fossil from the Miocene Mizunami Group, with special reference to fossil haliotid fauna in Neogene and Quaternary of Japan. *Bulletin of the Mizunami Fossil Museum* 9: 1–14.
- 1982 Tomida, S., and J. Itoigawa. *Parajanthina japonica*, gen. et sp. nov., and its related species of fossil janthinid gastropod from the Pliocene Formation in Totomi District, Central Japan. *Bulletin of the Mizunami Fossil Museum* 9: 59–63.
- 1982 糸魚川淳二. 軟体動物から見た古環境. 地学団体研究会総会シンポジウム資料集 36: 22–27.
- 1982 糸魚川淳二・柴田 博・西本博行・奥村好次. 瑞浪層群の化石—2. 貝類(軟体動物)(続)—. 瑞浪市化石博物館専報 3B: 330 p.
- 1982 津田禾粒・糸魚川淳二・山野井 徹. 日本海側の中期中新世の古環境について—とくに新潟・富山を中心として—. 日本海の地質. 東海大学出版会. 東京. 409–417.
- 1983 糸魚川淳二. 瀬戸内海東部沿岸地域の中新世軟体動物群集. 瑞浪市化石博物館研究報告 10: 29–39.
- 1983 浜田隆士・糸魚川淳二. 自然観察シリーズ 17 (地学編) 日本の化石. 小学館. 東京. 166 p.
- 1983 糸魚川淳二. 瑞浪の自然. 瑞浪市化石博物館. 65 p.
- 1983 津田禾粒・糸魚川淳二・山野井 徹. いわゆる西黒沢期におけるマングローブ沼の動植物群とその移動について(予報). 日本産新生代貝類の起源と移動. 起源と移動総研究事務局. 仙台. 65–68.
- 1984 Tsuda, K., J. Itoigawa, and T. Yamanoi. On the Middle Miocene paleoenvironment of Japan with special reference to the ancient mangrove swamps. In R. O. Whyte, ed., *The Evolution of the East Asian Environment*. Volume 2. University of Hong Kong. Hong Kong. 388–396.
- 1984 Itoigawa, J., and H. Nishimoto. Fossil Rissoidae and Rissoinidae (Gastropoda) of the Miocene Mizunami Group, Central Japan. *Bulletin of the Mizunami Fossil Museum* 11: 21–38.
- 1984 糸魚川淳二. 軟体動物化石から見たデスモスチルス類の生息古環境. 地団研専報 28, デスモスチルスと古環境: 35–43.
- 1984 Tomida, S., and J. Itoigawa. *Hartungia*, the correct name for *Parajanthina*. *Bulletin of the Mizunami Fossil Museum* 11: 111–112.
- 1984 糸魚川淳二・津田禾粒・山野井 徹. 熱帯環境, とくにマングローブ沼の調査—フランス領ニューカレドニア島—. 地学雑誌 93(4): 259–261.
- 1984 坂本 亨・桑原 徹・糸魚川淳二・高田康秀・脇田浩二・尾上 亨. 名古屋北部地域の地質地域地質研究報告(5 万分の1 地質図幅). 地質調査所. 64 p., 1 map.
- 1985 糸魚川淳二・木村一朗. 知多半島の更新統野間層産軟体動物化石. 瑞浪市化石博物館研究報告 12: 159–169.
- 1985 糸魚川淳二・西本博行・柄沢宏明・奥村好次. 瑞浪層群の化石—3. サメ・エイ類(板鰓類)—. 瑞浪市化石博物館専報 5: 89 p.
- 1985 糸魚川淳二. 瀬戸内地質区の研究史. 地団研専報 29, 瀬戸内区の特徴: 1–14.
- 1986 森下 晶・糸魚川淳二. 図説, 古生態学. 朝倉書店. 171 p.
- 1986 Itoigawa, J. Temporal and spatial distributions of molluscan fauna in Late Cenozoic of Japan. *Palaeontological Society of Japan, Special Papers* 29, *Japanese Cenozoic Molluscs—Their Origin and Migration—*: 47–54.
- 1986 Tsuda, K., J. Itoigawa, and T. Yamanoi. Mangrove Swamp Fauna and Flora in the Middle Miocene of Japan. *Palaeontological Society of Japan, Special Papers* 29, *Japanese Cenozoic Molluscs—Their Origin and Migration—*: 129–134.
- 1986 Itoigawa, J., and H. Shibata. Molluscan Fauna of the Setouchi Miocene Series, Southwest Japan. *Palaeontological Society of Japan, Special Papers* 29, *Japanese Cenozoic Molluscs—Their Origin and Migration—*: 149–159.
- 1986 Tomida, S., and J. Itoigawa. Occurrence of *Hartungia* sp. (Gastropoda: Janthinidae) from the Senhata Conglomerate near Nokogiriyama of the Boso Peninsula, Chiba Prefecture, Japan. *Bulletin of the Mizunami Fossil Museum* 13: 115–124.
- 1986 糸魚川淳二・津田禾粒. 中新世中期の日本の古環境. 海洋科学 18(3): 133–139.
- 1986 糸魚川淳二・津田禾粒. 中新世熱帯系貝類群集の古生態的特性—特にマングローブ沼群集について—. 瑞浪市化石博物館専報 6, 日本産新生代貝類の群集特性: 171–182.
- 1986 坂本 亨・高田康秀・桑原 徹・糸魚川淳二. 名古屋南部地域の地質. 地域地質研究報告(5 万分の1 地質図幅). 地質調査所. 55 p. 1 map.
- 1986 糸魚川淳二. 京都時代(戦後)の黒田先生. ちりぼたん 17(3・4): 56–57.
- 1987 糸魚川淳二. 西南日本及び朝鮮半島の中新世前・中期軟体動物化石群. 島根大学地質学

- 研究報告 6: 29–38.
- 1987 糸魚川淳二・津田禾粒・山野井 徹. 熱帯環境, とくにマングローブ沼の調査(パラオ諸島). 地学雑誌 96: 59–60.
- 1987 糸魚川淳二. 日本の博物館と研究—小さい博物館, 瑞浪市化石博物館を例として. 日本の科学者 22: 62–67.
- 1987 糸魚川淳二. 槇山次郎先生を悼む. 化石 42: 46–47.
- 1987 糸魚川淳二. 槇山次郎先生の思い出(故槇山次郎名誉会長追悼). ちりぼたん 18(1): 8–10.
- 1987 Itoigawa, J. Quaternary stratigraphy of the Kakegawa area, central Japan. In M. Itihara and T. Mamei, eds., Proceedings of the First International Colloquium on Quaternary Stratigraphy of Asia and Pacific Area, Osaka, 1986. National Committee for Quaternary Research, Science Council of Japan. Osaka. 65–73.
- 1988 糸魚川淳二. 掛川地域の第四紀層. 地質学論集 30, 日本の第四紀層の層序区分とその国際対比: 103–110.
- 1988 糸魚川淳二. 岡山県の浪形層の貝化石群集. 中国地方および日本海沿岸水域新生界の古生物学的研究, 文部省科学研究費補助金(一般研究 C)研究成果報告書(昭和 56 年度)課題番号 00554252. 7–8.
- 1988 糸魚川淳二・西本博行・延原尊美. 瑞浪層群の貝化石の新産地. 瑞浪市化石博物館研究報告 15: 57–64.
- 1988 糸魚川淳二. 地質 1.2.1 概説. 安藤万寿男他, 木曾三川—その流域と河川技術—. 建設省中部地方建設局. 34–39.
- 1988 糸魚川淳二. 地質 1.2.4 古瀬戸内海と東海湖・古木曾川. 安藤万寿男他, 木曾三川—その流域と河川技術—. 建設省中部地方建設局. 62–68.
- 1988 中部地方 II 編集委員会(編). 中部地方 II. 共立出版. 310 p. (分担執筆)
- 1988 Itoigawa, J. The Miocene Kadonosawa fauna of Japan. Saito Ho-on Kai Special Publication, no. 2, Prof. T. Kotaka commemorative Volume on Molluscan Paleontology: 397–403.
1989. 糸魚川淳二. 瑞浪層群の古生態学的意義. 日本ベントス研究会誌 37: 91–95.
- 1989 柴田 博・糸魚川淳二. 古瀬戸内海とマングローブ沼 1 瀬戸内区と古瀬戸内海. アーバンクボタ 28: 2–9.
- 1989 糸魚川淳二. 古瀬戸内の生きものたち—瑞浪層群を中心に— 2 瑞浪層群—古地理と貝類化石—. アーバンクボタ 28: 16–22.
- 1989 Tomida, S., and J. Itoigawa. Occurrence of *Hartungia* (Gastropoda: Jantthinidae) from the Pliocene Hatsuzaki Group in Hitachi City, Ibaraki Pref., Japan. Bulletin of the Mizunami Fossil Museum 16: 125–129.
- 1989 速水 格・加藤 誠・森 啓・増田孝一郎・猪郷久義・野田浩司・山口寿之・棚部一成・阿部勝巳・大路樹生・市川健雄・小島郁夫・加瀬友喜・糸魚川淳二・鎮西清高・清水大吉郎・両角芳郎・岡本和夫・田代正之・岡崎美彦・柳田寿一・岩崎泰穎. 古生物タイプ標本の保全に関する研究, 昭和 61–63 年度科学研究費補助金(総合研究 A) 研究成果報告書. 研究代表者 速水 格(東京大学理学部). 61 p.
- 1989 Itoigawa, J. Tropical spike in early Middle Miocene (ca. 16 Ma) of southwest Japan. In L. Gengwu, R. Tsuchi, L. Qibin, and National Working Group of China for IGCP-246, eds., Proceeding of International Symposium on Pacific Neogene Continental and Marine Events. Nanjing University Press. Nanjing. 19–26.
1989. 糸魚川淳二. 日本における新生代軟体動物の古動物地理学的研究(課題研究番号 62540601) 昭和 63 年度科学研究費補助金(一般研究(C))研究成果報告書. 研究代表者 糸魚川淳二(名古屋大学理学部). 11 p.
- 1989 糸魚川淳二・奥村好次・成瀬篤(編). 特別展図録 第 31 回特別展 日本の化石・世界の化石. 瑞浪市化石博物館. 39 p.
- 1990 糸魚川淳二. 海生軟体動物化石の時空分布と系統—日本の中新世を中心に—. 瑞浪市化石博物館専報 7, 日本の新生代生物相—時空分布と系統を中心に: 83–99.
- 1990 糸魚川淳二. 地球の歴史をさぐる 8, 日本が熱帯だったころ—瑞浪の化石ものがたり. 青木書店. 184 p.
1990. 糸魚川淳二. 古生態と古環境—無脊椎動物を例として. 化石研究会誌 22: 42–46.
- 1990 糸魚川淳二. 東海の地質, 3. 第三紀・第四紀層. 東海の自然誌. 東海財団. 28–47.
- 1990 糸魚川淳二. 地学系自然史博物館の理想と現実. 地質ニュース 431: 7–10.
- 1990 糸魚川淳二. 自然史博物館—これからどうするか. UP(東京大学出版会 PR 誌) 19(5): 19–25.
- 1990 Itoigawa, J., and T. Yamanoi. Climatic optimum in the Mid-Neogene of the Japanese Islands. In R. Tsuchi and IGCP projects 246, eds., Pacific Neogene Events; Their Timing, Nature and

- Interrelationship. University of Tokyo Press. Tokyo. 3–14.
- 1991 日本古生物学会(編). 古生物学事典. 朝倉書店. 410 p. (分担執筆)
- 1991 糸魚川淳二・延原尊美. オランダ国立自然史(旧地質学・鉱物学)博物館(ライデン)所蔵の東南アジア・日本産化石貝類の研究. 地学雑誌 100: 795–797.
- 1991 延原尊美・窪田祐亨・糸魚川淳二・松岡敬二. 三河湾の貝類遺骸群集 第一部 二枚貝類遺骸群集. 豊橋市自然史博物館研究報告 1: 13–32.
- 1991 糸魚川淳二. 自然史学のこれからと博物館. 月刊地球 13: 683–693.
- 1991 Itoigawa, J. Miocene sedimentary basins and molluscan faunas in southwest Japan. In J. M. Dickins, K. G. McKenzie, K. Mori, et al., eds., Saito Ho-on Kai Special Publication 2, Proceedings of Shallow Tethys 3, Sendai, 1990: 295–302.
- 1992 Itoigawa, J. Miocene Sequences and the Mizunami Fossil Museum (B17). IGC Field Trip Guide Book, 29th/Island Arcs: Cenozoic Stratigraphy and Tectonics of Japan. Geological Survey of Japan. 151–157.
- 1992 Itoigawa, J. Miocene paleogeography of the Mizunami Group of the Tono region, central Japan. Paleogeography, Palaeoclimatology, Palaeoecology 100: 209–215.
- 1992 糸魚川淳二・柴田 博. 瀬戸内区の中新世古地理(改訂版). 瑞浪市化石博物館研究報告, 糸魚川淳二博士記念号 19: 1–12.
- 1992 糸魚川淳二. 海の中環境の復元—軟体動物化石による—. 豊橋市自然史博物館研究報告 2: 41–52.
- 1992 延原尊美・窪田祐亨・糸魚川淳二・松岡敬二. 三河湾の貝類遺骸群集—第2部 巻貝類・角貝類—. 貝類学雑誌 51(1–2): 95–113.
- 1993 津田禾粒・寺澤達彦・糸魚川淳二・山野井 徹. *Telescopium telescopium* の形態と進化. 新潟大学教養部研究紀要 25:1–11.
- 1993 糸魚川淳二. 日本が熱帯であった頃. 日本の科学者 28(6): 348–349.
- 1993 糸魚川淳二. 日本の自然史博物館. 東京大学出版会. 東京. 228 p.
- 1993 松岡敬二・糸魚川淳二. 第7回特別企画展図録, 今よみがえる恐竜の世界. 豊橋市自然史博物館. 70 p.
- 1993 松岡敬二・糸魚川淳二. シンポジウム「大進化」. 大進化 講演資料集. 豊橋市自然史博物館. 1–2.
- 1993 柄沢宏明・糸魚川淳二. 中新統鮎川層群より産した真珠化石. 名古屋大学古川総合研究資料館報告 9: 131–136.
- 1993 糸魚川淳二. 明治出版物にみる図・図版の変遷. 地質ニュース 472: 56–63.
- 1995 糸魚川淳二. 瑞浪の自然(改訂版). 瑞浪市化石博物館. 68 p.
- 1995 糸魚川淳二. 今金町立博物館(仮称)の展望. 今金地域研究 1: 1–6.
- 1996 新版地学事典編集委員会(編). 新版 地学事典. 平凡社. 1, 840 p. (分担執筆)
- 1996 日本シデコブシを守る会. シデコブシの自生地. 日本シデコブシを守る会. 瑞浪. 217 p.
- 1997 坂之上 一・糸魚川淳二. 松江市乃白産の中世軟体動物化石. 豊橋市自然史博物館研究報告 7: 1–10.
- 1999 糸魚川淳二. 新しい自然史博物館. 東京大学出版会. 東京. 229 p.
- 2001 糸魚川淳二. 愛知万博—これまでとこれから. 日本の科学者 36: 33–37.
- 2001 糸魚川淳二. 東海丘陵要素(植物)と自然保護. 地学教育と科学運動 36: 55–61.
- 2002 糸魚川淳二・柳沢忠男. 長野県豊科町中谷・大口沢産の中世頭足類化石. 豊橋市自然史博物館研究報告 12: 29–35.
- 2002 糸魚川淳二・井沢伸恵. 南西諸島マングローブ沼の軟体動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告 12: 17–28.
- 2003 津田禾粒・糸魚川淳二・山野井 徹. 東南アジア・南西太平洋マングローブ沼調査(NINAYA 調査), 1980–2000. 瑞浪市化石博物館専報 9, マングローブ沼の比較環境学—日本(中新世)と東南アジア・南西太平洋(現生), 軟体動物と花粉を中心に: 3–71.
- 2003 糸魚川淳二・津田禾粒・寺澤達雄・佐伯富男. 東南アジア・南西太平洋マングローブ沼の軟体動物. 瑞浪市化石博物館専報 9, マングローブ沼の比較環境学—日本(中新世)と東南アジア・南西太平洋(現生), 軟体動物と花粉を中心に: 73–127.
- 2003 寺澤達雄・津田禾粒・糸魚川淳二. *Telescopium telescopium*(センニンガイ)の形態異変—2. 瑞浪市化石博物館専報 9, マングローブ沼の比較環境学—日本(中新世)と東南アジア・南西太平洋(現生), 軟体動物と花粉を中心に: 231–247.
- 2003 糸魚川淳二・山野井 徹・寺澤達雄・斎藤毅・津田禾粒. シンガポールにおけるマングローブ沼の環境変化(1980–2000). 瑞浪市化石

- 博物館専報 9, マングローブ沼の比較環境学—日本(中新世)と東南アジア・南西太平洋(現生), 軟体動物と花粉を中心に: 249–267.
- 2003 糸魚川淳二・津田禾粒・山野井 徹・斎藤毅・寺澤達雄. マングローブ沼の比較環境学—日本(中新世)と東南アジア・南西太平洋(現生)—. 瑞浪市化石博物館専報 9, マングローブ沼の比較環境学—日本(中新世)と東南アジア・南西太平洋(現生), 軟体動物と花粉を中心に: 269–311.
- 2004 糸魚川淳二. 宮沢賢治の「イギリス海岸」産足跡および生痕化石. 豊橋市自然史博物館研究報告 14: 9–14.
- 2004 糸魚川淳二. 西本博行さんの思い出. 瑞浪市化石博物館研究報告 31: 99–100.
- 2007 糸魚川淳二. シデコブシ・ハナノキ・ヒツバタゴの自生地の地形と地質(予報). 地学雑誌 116(5): 673–680.
- 2007 糸魚川淳二・佐藤正孝・芹沢俊介(編). 海上の森の自然史. あいち海上の森センター.
- 2007 高野征宣・岡本和夫・中島 礼・利光誠一・兼子尚知・糸魚川淳二. 中国地方及び九州地方の新生代貝類化石標本(その 2). 地質調査研究報告 58(1–2): 53–67.
- 2008 糸魚川淳二・塚田真一郎. 自然がいっぱい 中津川市の天然記念物. 中津川市鉱物博物館. 74 p.
- 2009 糸魚川淳二. 日本の自然史系博物館の現在(2008). 瑞浪市化石博物館研究報告 35(Supplement), 特集「博物館—現在と未来—»: 1–12.
- 2009 柄沢宏明・糸魚川淳二. 瑞浪市化石博物館と研究報告. 瑞浪市化石博物館研究報告 35 (Supplement), 特集「博物館—現在と未来—»: 21–24.
- 2009 糸魚川淳二. 包括的展示論. 瑞浪市化石博物館研究報告 35 (Supplement), 特集「博物館—現在と未来—»: 37–51.
- 2010 糸魚川淳二. 包括的博物館 —21 世紀の博物館像—. 瑞浪市化石博物館研究報告 37: 91–126.
- 2011 糸魚川淳二. シデコブシ・ハナノキ・ヒツバタゴの自生地 – 1—地形・地質・水環境との関連を中心に—. 瑞浪市化石博物館研究報告 37: 149–180.
- 2013 糸魚川淳二. シデコブシ・ハナノキ・ヒツバタゴの自生地 – 2—自然環境と自生地の現況—. 瑞浪市化石博物館研究報告 39: 91–121.
- 2014 野嶋宏二・青島 晃・増田耕一・糸魚川淳二. 静岡県中部更新統下部谷下層の地質年代と古植生. 福井県立恐竜博物館紀要 13: 37–45.
- 2015 糸魚川淳二. シデコブシ・ハナノキ・ヒツバタゴの自生地 – 3—包括的検討—. 瑞浪市化石博物館研究報告 41: 133–162.
- 2016 齊藤 毅・山野井 徹・岡戸祐樹・小林巖雄・神蔵勝明・渡邊剛忠・市橋弥生・糸魚川淳二. 佐渡島に分布する下戸層(下部/中部中新統)の花粉化石(予報)—とくにマングローブ花粉 *Kandelia* の産出について—. 調査研究報告書 佐渡の自然史 4: 57–68.
- 2017 Nojima, K., and J. Itoigawa. Tomistominae gen. et sp. indet. (Crocodylia: Crocodylidae) from the Lower Yage Formation (Middle Pleistocene) in Hamamatsu City, Shizuoka Prefecture, Japan. Bulletin of the Mizunami Fossil Museum 43: 35–46.
- 2018 安藤佑介・糸魚川淳二. 瑞浪北中学校敷地造成工事現場に露出した明世層中の *Crenomytilus* (エゾイガイ) 密集部から産出した貝類化石. 瑞浪市化石博物館研究報告(特別号) 44: 13–24.
- 2018 安藤佑介・糸魚川淳二. 瑞浪北中学校敷地造成工事現場(岐阜県瑞浪市土岐町)の下部中新統瑞浪層群明世層から産出した貝類化石. 化石 104: 1–2(口絵).

Appendix 2 命名したタクサ

Polyplacophora

Lepidopleurus (Dashaysiella) morozakiensis Itoigawa, Nishimoto, and Tomida, 1977

Gastropoda

Austrosina gotoi Itoigawa and Nishimoto, 1984

Batillaria minoensis Itoigawa, 1960

Batillaria mizunamiensis Itoigawa, 1960

Cantharidus mizunamiensis Itoigawa and Shibata, 1976

Cellana depressa Itoigawa and Shibata, 1976

Cerithidea (Cerithideopsilla) minoensis Itoigawa, 1960

Crepidula minoensis Itoigawa, 1960

Cylichnatys minoensis Itoigawa, 1960

Cymatiella variegata Itoigawa and Shibata, 1976

Cymatosyrinx minoensis Itoigawa, 1960

Decorifer ena Itoigawa, 1958

Diodora minoensis Itoigawa, 1960

Eocylichna habei Itoigawa, 1958

Eocylichna tokiensis Itoigawa, 1958

Euchelus minoensis Itoigawa, 1960

Granotoma dissolutea gosenensis Itoigawa, 1958

Hamalopoma hidaensis Itoigawa, 1960
Homalopoma solidus Itoigawa and Shibata, 1976
Haurakia convexa Itoigawa and Nishimoto, 1984
Inquisitor mizunamiensis Itoigawa, 1960
Leptothyra ena Itoigawa, 1955
Liotina minoensis Itoigawa, 1960
Lunella kurodai Itoigawa, 1955
Mangelia minoensis Itoigawa, 1960
Miocenehadra Habe and Itoigawa, 1976
Miocenehadra mizunamiensis Habe and Itoigawa, 1976
Miocenehadra nakamurai Habe and Itoigawa, 1978
Miohaliotis Itoigawa and Tomida, 1982
Miohaliotis amabilis Itoigawa and Tomida, 1982
Monodonta (Monodonta) minuta Itoigawa and Nishikawa, 1976
Nassarius hongoensis Itoigawa, 1955
Nassarius (Zeuxis) minoensis Itoigawa, 1960
Natica (Naticarius) minoensis Itoigawa, 1960
Nerita kamigiriensis Itoigawa, 1955
Nucella tokishiensis Itoigawa and Shibata, 1976
Pandalosia mizunamiensis Itoigawa and Nishimoto, 1984
Parajanthina Tomida and Itoigawa, 1982
Parajanthina japonica Tomida and Itoigawa, 1982
Phos (Coraeophos) iwakianus tsukiyoshianus Itoigawa, 1960
Phos minoensis Itoigawa, 1960
Pictoneritina kibiensis Itoigawa and Nishikawa, 1976
Polinices mizunamiensis Itoigawa, 1960
Proterato (Sulcerato) callosa minoensis Itoigawa, 1960
Protorotella shukuborensis Itoigawa, 1960
Puncturella minoensis Itoigawa and Shibata, 1976
Pupa hiyoshiensis Itoigawa, 1958
Purpula (Mancinella) minoensis Itoigawa, 1960
Pyrene (Mitrella) minoensis Itoigawa, 1960
Pyrene (Indomitrella) mizunamiensis Itoigawa, 1960
Retusa (Coelophysis) shukuborensis Itoigawa, 1958
Retusa (Coelophysis) tokiensis Itoigawa, 1960
Rhinoclavis (Proclava) minoensis Itoigawa, 1960
Rhinoclavis (Proclava) tokiensis Itoigawa, 1960
Scaliola hiyoshiensis Itoigawa and Shibata, 1976
Sigaretornus kujiriensis Itoigawa and Shibata, 1976
Sigatica kurodai Itoigawa and Shibata, 1976
Siphonalia makiyamai Itoigawa, 1955
Siphonalia minoensis Itoigawa, 1960
Siphonalia minuta Itoigawa, 1955
Siphonalia praedeclivis Itoigawa, 1953
Siphonalia shukuborensis Itoigawa, 1960
Tachyrhynchus yamaokaensis Itoigawa and Shibata, 1976
Tectura minoensis Itoigawa, 1960

Terebra (Acuminea) minoensis Itoigawa, 1960
Triphora (Triphora) minoensis Itoigawa, 1960
Tristichotrochus takeharai Itoigawa and Shibata, 1976
Turbo (Marmostoma) minoensis Itoigawa, 1960
Uzumakiella habe Itoigawa and Shibata, 1976
Volvulella minoensis Itoigawa, 1958
Volvulella tokiensis Itoigawa, 1960
Volvulella yamauchii Itoigawa, 1958
Zebinella oyamai Itoigawa and Nishimoto, 1984

Cephalopoda

Spirula mizunamiensis Tomida and Itoigawa, 1981

Bivalvia

Acar sakuradoensis Itoigawa and Shibata, 1975
Anisocorbula venusta elongata Itoigawa, 1955
Arca minoensis Itoigawa and Shibata, 1975
Barbatia (Savignyarca) kubara Itoigawa, 1955
Barbatia (Savignyarca) minoensis Itoigawa, 1960
Bentharca echigoensis Itoigawa, 1958
Bentharca takuroi Itoigawa and Shibata, 1975
Cadella minoensis Itoigawa and Shibata, 1975
Cardita minoensis Itoigawa, 1960
Chlamys egregius Itoigawa, 1955
Chlamys (Chlamys) iwamurensis Itoigawa, 1955
Chlamys minoensis Itoigawa, 1960
Clinocardium andoi Itoigawa and Shibata, 1975
Ctena minoensis Itoigawa, 1960
Dimya minoensis Itoigawa, 1960
Donax (Latona) minoensis Itoigawa, 1960
Glycymeris ikebei Itoigawa and Shibata, 1975
Glycymeris minoensis Itoigawa, 1955
Isognomon (Melina) minoensis Itoigawa, 1960
Ledella okumurai Itoigawa and Shibata, 1975
Leukoma minoensis Itoigawa, 1960
Limatula (Limatula) minoensis Itoigawa, 1960
Lithophaga (Leiosolenus) rechifora Itoigawa, 1955
Maoricardium mizunamiense Itoigawa and Shibata, 1975
Modiolus nakamurai Itoigawa and Shibata, 1975
Nipponomarcia nakamurai imobarensis Itoigawa and Shibata, 1976
Notomyrtea minoensis Itoigawa, 1960
Parapholas hiyoshiensis Itoigawa, 1960
Parapholas minoensis Itoigawa, 1960
Placopecten todaniensis Itoigawa and Nishikawa, 1976
Pseudopythina minoensis Itoigawa, 1960
Saccella miensis tenuata Itoigawa and Shibata, 1975
Saccella minoensis Itoigawa, 1960
Semele tokaiensis Itoigawa and Shibata, 1975

Septifer (Mytilisepta) agiensis Itoigawa, 1955
Siliqua minoensis Itoigawa, 1960
Squillaconcha nishimotoi Itoigawa and Shibata, 1975
Tapes (Amygdala) miyamuraensis Itoigawa, 1956
Thracia watanabei Itoigawa and Shibata, 1975
Thyasira (Thyasira) minoensis Itoigawa, 1960
Varicorbula danensis Itoigawa and Shibata, 1975
Venatomya yamauchii Itoigawa, 1960
Venericardia (Pleuromeris) minoensis Itoigawa,
 1960
Venericardia (Cyclocardia) myogadaniensis Itoigawa,
 1958
Venus (Ventricolaria) kimatai Itoigawa and Shi-
 bata, 1975
Wallucina habei Itoigawa, 1955
Wallucina okumurai Itoigawa and Shibata, 1975
Yoldia (Cnesterium) ensifera akeyoensis Itoigawa and
 Shibata, 1975

Scaphopoda

Siphonodentalium (Pulsellum) minoensis Itoigawa,
 1960

(以上, 3新属113新種7新亜種)

Appendix 3 献名されたタクサ

Radiolaria

Secuicollacta itoigawai Furutani, 1990
Tetrarhopalus itoigawai Sugiyama, 1992

Gastropoda

Cavolinia itoigawai Ujihara, 1996
Cypraea (Zoila) itoigawai Tomida, 1989
Euclio itoigawai Shibata, 1983
Patella itoigawai Kase, 1994
Ringiculospongia itoigawai Shibata, 1970
Teinostoma itoigawai Taguchi, 1992
Terebralia itoigawai Taguchi, Osafune, and
 Obayashi, 1981

Cephalopoda

Argonauta itoigawai Tomida, 1984

Bivalvia

Chlamys (Chlamys) itoigawae Masuda, 1962
Leukoma itoigawae Tsuda, 1959
Ostrea itoigawai Taguchi, 1992

Malacostraca Decapoda

Cancer (Glebocarcinus) itoigawai Karasawa, 1990
Itoigawaia Karasawa, Sakumoto, and Takayasu, 1992
Tymolus itoigawai Takeda and Tomida, 1984

Ostracoda

Bairdoppilata itoigawai Yajima, 1992

柄沢宏明: 瑞浪市化石博物館
 〒509-6132 瑞浪市明世町山野内 1-47
 Hiroaki Karasawa: Mizunami Fossil Museum
 1-47, Akeyo, Mizunami, Gifu 509-6132, Japan
 <gha06103@nifty.com>